

日本人ゲリラ

放っておけないから闘う

うわさに聞いていた西山君と初めて会ったのは、マラリアがまん延するビルマ（ミャンマー）・タイ国境のジャングルの中だった。ビルマの先住民族・カレン族取材のために日本で情報収集していたころから、武器を持って戦闘に参加している日本人がいることは聞いていた。ただの軍事オタクじゃないの、と言う人もいた。

現地に入り、ビルマ軍事政権に抵抗して闘うゲリラ勢力の司令部に寝泊まりして数ヶ月、彼の名前を自然と耳にするようになった。そしてある日、前線から帰ってきた西山君を目の前にした。

「どうも・・・」

最初に交わしたのは、そんな言葉だった。何かよそよそしい。無理もない。彼だって、こんなジャングルの中で、ヒゲぼうぼうの日本人と出会うなんて夢にも思わなかったに違いない。しばらくはお互いに警戒していたが、狭い司令部の中に逃げ場はない。その日のうちに色々と話すようになった。

「そうですか、昭和三〇年代生まれで

すか。自分も、自分の友人も、日本を出て好きなことをしているのはほとんど三〇年代生まれですね。みんな同類ですね。関西出身ですか。それも同じですね」

話をする中で、彼がジャーナリストに對してあまり良い感情を抱いていないことがわかってきた。取材するだけして、後で何の連絡もしてこない人が多いからだという。しかし、ジャングルの中で一人生活を続ける私に對しては、悪い印象は持っていないようだった。

うわさ通り、彼は武器を持ち、戦闘に参加していた。しかし、彼は強調して言った。「自分はお金をもらって戦闘に参加する傭兵でも、戦闘好きの武器オタクでもない。友人であるカレン人の置かれてある状況を知れば知るほど放っておけなくなってきたんだ。ボランティアなんだ」

静かに語る彼の表情は、真剣そのものだった。実際、彼は戦闘だけでなく、移動診療隊員として、医療設備のない山深くに住むカレン村民に薬を届けるといった活動も続けていた。

日本には数ヶ月に一度帰り、活動資金を稼ぐために建設現場で働いたり、引越しのアルバイトをしたりする。慢性のマラリアにかかっている彼は、年に何度

か発熱して寝込んでしまう。だが、この活動をやめようという気はないらしい。これからもずっと、そうやって暮らしていくの？

彼に對して、それはできない質問だ。それぞれの「On the Road」なのだから。

キャプション

・襲撃に備えるカレン兵 ビルマ・カレン州で

追記

一九九七年一月、彼がマラリアから肺炎を併発し、タイ・バンコクで三二歳の若さで息を引き取りました。

彼についての追記は、オン・ザ・ロード番外編 日本人ゲリラの死 をご覧ください